

研究論文

発見された海浜部の縄文遺跡と大震災の復興

森岡秀人

要 旨

既に 30 年の歳月が経過した阪神淡路大震災では、災害後の埋蔵文化財調査としては初めての全国支援を受けての発掘調査が実施された。兵庫県にその調査組織を置く支援調査では、被災地各地で多くの成果があがっている。筆者が勤務していた芦屋市では発掘調査量が平常時の 10 倍程度膨らんだが、復興に際しての工事では深い基礎掘削のため、深部に位置していた縄文時代に属する遺構・遺物もその発見のケースが増加した。本稿で再検討する若宮遺跡も新出例の典型ともいえる縄文遺跡で、晩期後半の突帯文土器が比較的層序を保って出土し、在地的な土器変遷の様相の一端を明らかにした。

遺跡は大阪湾北岸の海浜部にあり、汀線近くの低所から見つかった。その Loc.3 では低位段丘の末端を流下する自然流路内から弥生土器とは分離する状況で突帯文土器が出土しており、その様相を個体差、型式差などに注意しつつ観察結果を提示した。遺跡の展開は、滋賀里Ⅱ式から滋賀里Ⅳ式・口酒井式まで認められるが、本地点における様相の一端を明示することによって、遠賀川集団による初期農耕集落の定着域と微妙な違いがあることが明らかになった。また、打出丘陵一帯の在地の突帯文土器の色調・胎土・製作技術の諸特徴をとらえ、生駒西麓産の搬入品などはほとんど認められない時期、様相であることを把握した。当時の海岸線や縄文集団・弥生集団の接触・非接触関係を考える上でも看過できないエリアとして、今後注目していく必要があるだろう。

キーワード：対象時代：縄文時代 晩期

対象地域：兵庫県 芦屋市

研究対象：縄文土器 突帯文土器

はしがき

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分に発生した阪神・淡路大震災から早くも 30 年になる。未だに筆舌には尽くし難い甚大な被害を阪神・淡路地域の各地にもたらしたが、兵庫県芦屋市は全半壊家屋が 85% にも達する大惨事となり、大阪湾岸に近い最南部の若宮地区一帯も目を覆う被害があったことが思い出される。私は芦屋市の文化財担当職員として、矢野健一氏は隣の西宮市の辰馬考古資料館の学芸員として、震災後の未経験の膨大な事後措置に東奔西走した。負傷の体が癒えるのにほぼ 1 か月を要したが、肋骨骨折の身を庇いつつ、1 日入院した後には職場への出勤命令がぐだり、被災家屋の分布地図を作成する緊急業務の任についた。噴きこぼれる涙を拭きつつ、被災地の地域をくまなく歩くことになった因果が図りしれないことに思い知らされた。

芦屋市市街地の海岸部は大阪湾北岸の一角を占める地域であり、こうした場所まで発掘調査の対象とすることは震災前では皆無であった。震災の前は一戸建て

専用住宅や店舗付き住宅、さらに老朽化の著しい文化住宅やアパートなどが密集して立ち並び、幅員 4 m 未満の細い街路が目立った住宅地である。広場や緑地の少なさや高齢者のウェイトの高さなどに鑑み、1995 年 7 月に作成をみた芦屋市震災復興計画では、地区全体の復興が急がれることになり、震災復興住環境整備事業が推進された。1996 年 3 月には事業計画の認可を得、用地買収などが進捗し、若宮地区まちづくり協議会と基本構想の協議が重ねられて、住民参画のまちづくりが行政との協働によって目指され、その推進にあたっては、埋蔵文化財に関する発掘調査の進め方なども当初より緊急協議の場についた。ただ本地域は阪神沿線より南の被災地も含み、埋蔵文化財の包蔵状況に関しては、データそのものを全く欠く地域であったため、平成 8 年度には、兵庫県教育委員会の行政指導の下、第 1 期工事となる若宮町住宅 1 号棟建設に伴う試掘調査から実施した。

1. 若宮遺跡の出現と立地環境

その結果、北方に位置する打出小槌遺跡とは明確に分離できる新遺跡の確認に至り、当時の汀線付近に位置する縄文・弥生時代の集落遺跡の存在が認識できる貴重な成果を得た。未周知の新発見の遺跡は、その後の事前調査の推移を勘案して、直ちに若宮遺跡と命名し、遺跡・遺物の発見届出を行うとともに、市開発部局や地域住民への周知を徹底した。被災した若宮町の住民には、遺跡に親しみを覚え、これから始まる緊急調査への理解を得るため、復興していく街並みに則した遺跡名となった。「若宮」とは小字名で、大字「打出」内の若宮神社の存在に由来するもので、北側の字界は旧西国街道である。若宮遺跡の主要部は、標高3～5mの海岸平野に存在し、市域東部を流下する宮川の沖積扇状地上に立地している（辻 2000・2001a・2001b）。遺物を伴った遺構面は、T.P.0.3～4.7mと大きな落差を伴っており、現海岸線には近世の生成とみられる打出浜砂州が東西に伸びており、その幅は150～350mに及ぶ。本遺跡のLoc.1・2の調査情報では、現地地表下0.8mの浅い位置に大阪層群が確認されており、伏在する活断層（西宮断層）が南側に存在し（神戸市・建設工学研究所 1999、岡田・東郷 2000、佐藤 1999）、本遺跡の北東域は大阪層群の浸食面に乗っているものと考えられ、丘陵地形と一部接触する。縄文海進クライマックス段階時でも遺跡範囲は水没しつつ、汀線ぎりぎりの生活環境が存在した可能性があり、それまでの予想を裏切るような場所に人々が住み着いていたようである。

縄文時代晩期前半の状況は、離水と水没を繰り返すような堆積環境で後背湿地のようであるが、晩期後半に入って、この地域に屈曲の著しい蛇行河川が中央付近を流下している（辻 2000・2001a・2001b・2003）。流路堆積は砂礫による充填物から成り、いわゆる凸型の横断面形を呈しており、周囲に及ぶ氾濫原面に対しては相対的に微高地化している状態が把握できた。突帯文土器段階に積極的な人間活動が始まり、続く弥生時代前期後半～中期初頭には、この微高地の上に発達する土壌形成段階に、初期定住を示す弥生人の営み（住居・土坑・墓・ピット）が跡付けられる。若宮遺跡は平面的には、宮川左岸域の国道43号線と阪神電鉄本線に挟まれた東西150m、南北135m程のものになり、これは中世末までの複合遺跡の範囲として掌握をみた。

しかし、縄文晩期段階には阪神沿線以南、海岸線近くまで遺構や遺物の広がりが想定され、未詳なことがあまりにも多い遺跡の存在となった（図1）。

2. 震災復興調査で判明した縄文時代晩期の若宮遺跡

震災後に新出した若宮遺跡の縄文時代における上限は、Loc.1の4面54層で確認された滋賀里Ⅱ式期の深鉢が示しており、この土器を包含した層が明確な範囲を持っていた（4m×9m程度）。この時期前後の市内資料は限られた存在であり、寺田遺跡第139地点西区4面土坑群（滋賀里Ⅲ式以前）や六条遺跡DブロックTr.5黒色シルト層（滋賀里Ⅲb式）など3例程度にとどまる。晩期後半への転換を示す資料としては、本遺跡Loc.4の4面SR02bの滋賀里Ⅲb式～Ⅳ式期の土器片やLoc.10の1-9層出土の滋賀里Ⅲb式期の土器片があげられるが、やはり類品は乏しい。本稿で扱うLoc.3調査区中央の自然流路の縄文晩期後半の突帯文土器段階になると、本遺跡で土器出土地点が明らかに増加する。分布の範囲は、東西120m、南北110mに広がりを見せ、拡大することが明瞭に判明する。逐一あげると、Loc.3-4面河道資料、Loc.4-3面SR01ベース及び被覆層の土器片、土器溜まり土器群、Loc.11-8層、Loc.16-1流路ベース6層、Loc.16-2（1）、Loc.17-2流路内9層、Loc.32Tr.3-5a層、Loc.34溝2埋土2などであり、散発的ながら突帯文土器や石製品が出土している。

遺構はLoc.11-8層内の石組・炭塊の微証が竪穴住居跡を示唆するのみで、明確なものは乏しいが、そのすべてを流出の二次的資料とみなすこともできず、今後検討課題を残している。この付近近くに滋賀里Ⅳ式期～口酒井式期の縄文集落が存在したことを示唆するものであろう。

Loc.3の発掘現場では、縄文土器と弥生土器は一瞥した時には、混在しているような印象を持ったが、出土状態を検証すると、層位的にも平面的にも確実に分離できるものであり、それは遺物全点の整理作業に従事して追証できることがはっきりした。

先ず弥生土器は近畿編年（寺沢・森岡 1989・1990）のⅠ・Ⅱ様式に属するもので、Loc.2出土資料、Loc.4出土資料（竹村 1999）と変わらない状況である。集中地区は2E区・1E区であり、1D区でも散見される。出土層位は第8層上面に多く認められ、次いで第8層上部が目立つ。器種には壺・甕があり、鉢や高坏は少量である。発掘現場ではこの前期土器群と晩期突帯文土器群の伴出が気になったが、結局、縄文土器と弥生土器の紛らわしい伴い方はみられなかった（図2・3）。

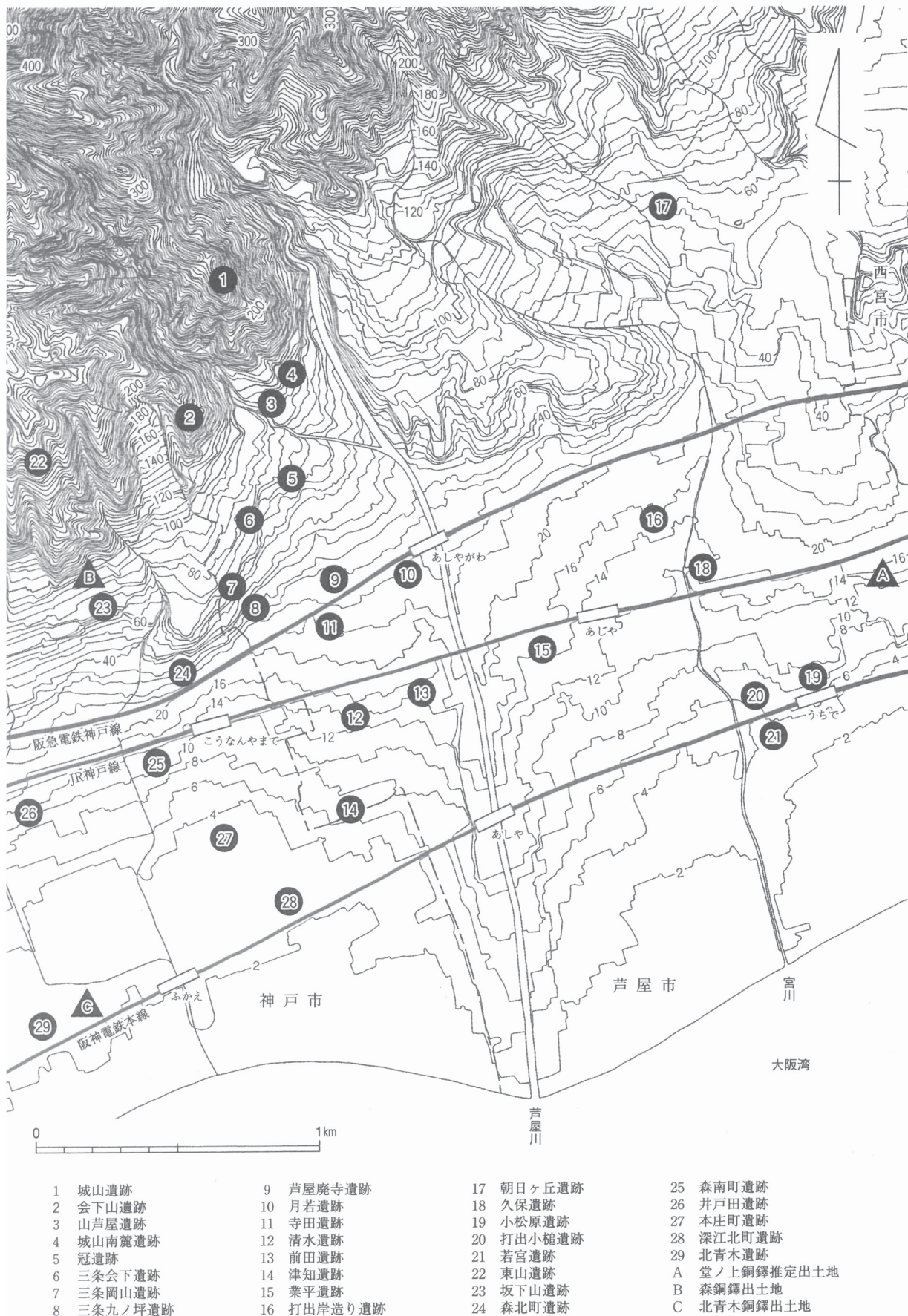
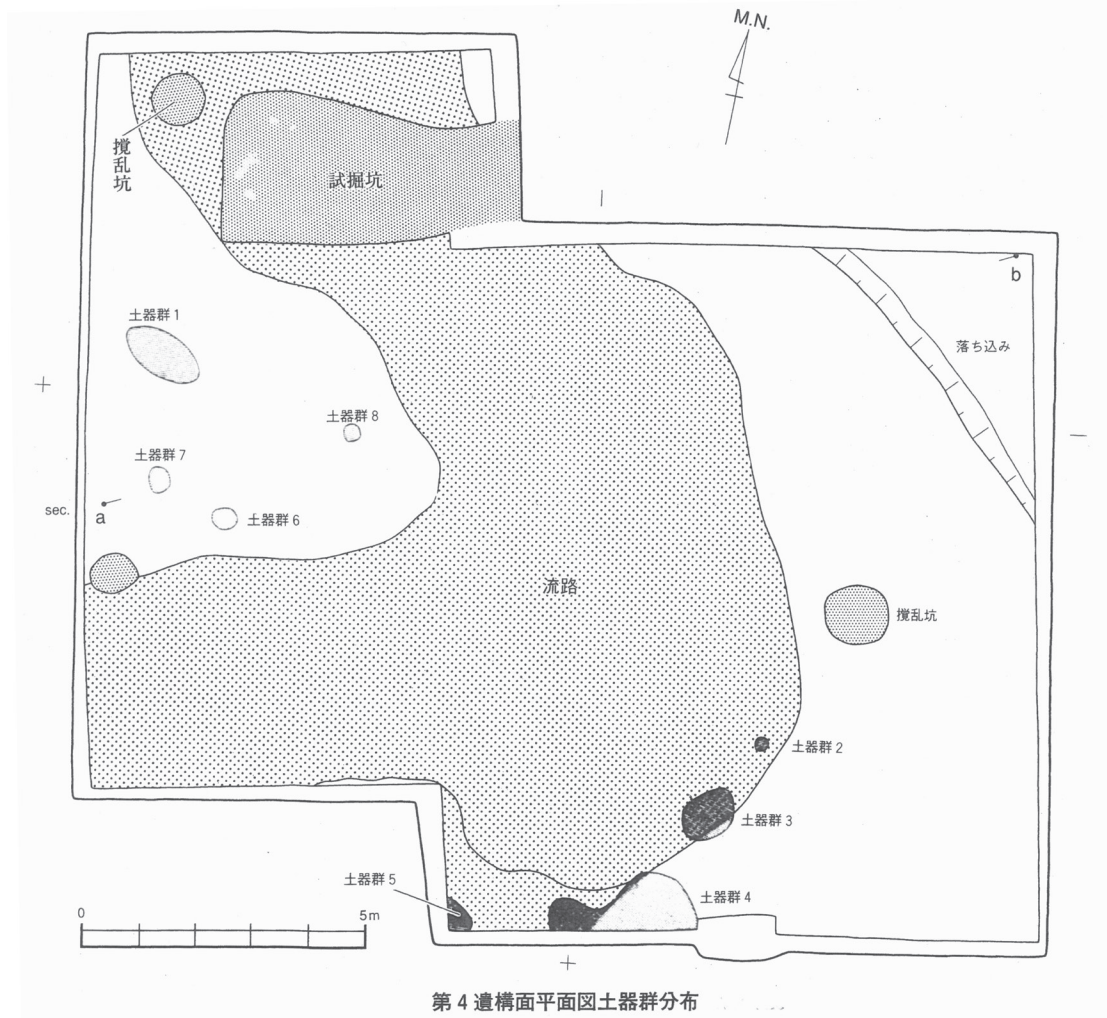


図1 若宮遺跡位置図



第4遺構面平面図土器群分布

図2 第3地点検出の自然流路平面図

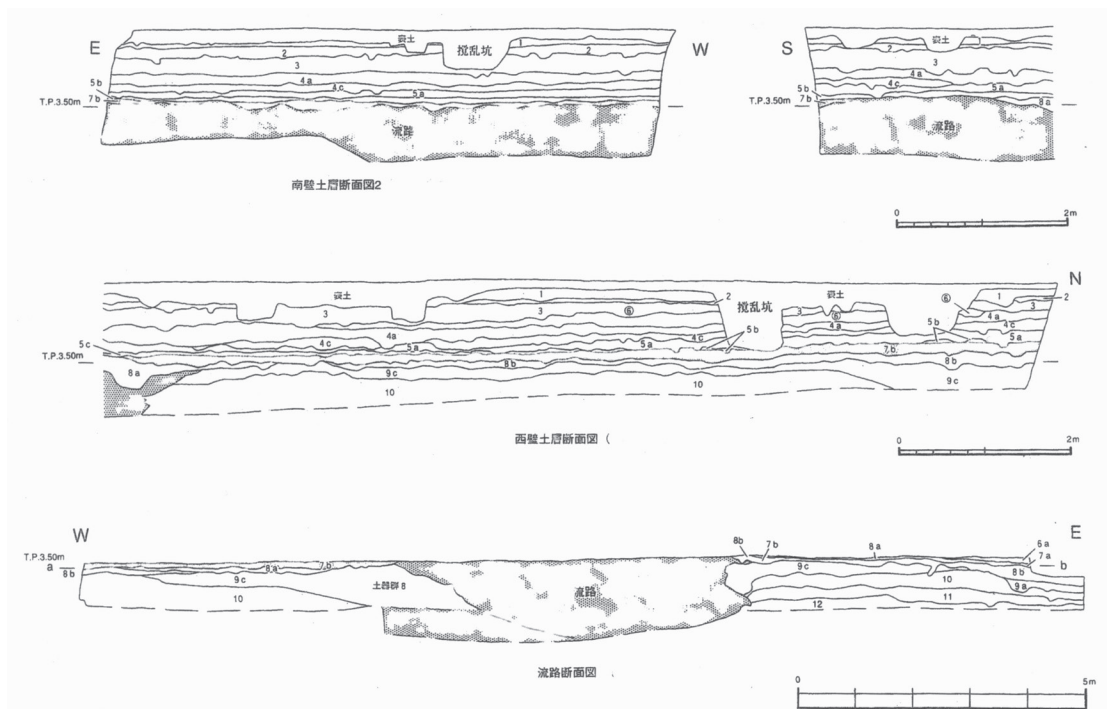


図3 第3地点流路東西断面図

3. 若宮 Loc.4 における縄文晩期土器の様相について

本地点の流路出土縄文土器片を数えてみたが、すべて晩期に帰属するもので、破片数 1,114 を数えた。出土層位は自然流路のベースないしは最終埋没時点では肩部を成す層である（第 8b・第 9c 層）。この河道の放棄時期は 8 層出土資料が該当するであろう。弥生土器は時間において、河道の埋積充填が進み、凸状の微高地が形成をみた段階以降の土壌層中に包含されたものと見做しうる。

縄文晩期突帯文土器は 8 群に分かつまとまりがあった。東岸側の土器群 2～4 は第 8 層中に、土器群 5 は第 9 層中に見出された。層位的な分離は可能であり、西岸においては第 9 層内に土器群 6 が検出されている。河道の機能時期は、ほぼ突帯文土器の示唆する時期に限られる。

以下では図化した縄文土器について略述したい。これらの表裏の拓本も調整手法を表現するため併せ掲載する。

口縁部外面に刻目突帯を持つ 1～50 は深鉢で、口径復元が可能なもの（1・2・6・8・13）は、2 を除いて胴部への移行も知り得る。胴部突帯は認められない。1 はごく一部を除いて突帯全体を刻むことはない。胴部突帯を思わせる破片（75・76・78・80・81・85）も存在し、小片資料からは 1 条突帯のみのものと 2 条突帯を具有するものとが含まれている。

1 は復元口径 41.2 cm、残存高 15.0 cm を計測する比較的大型の深鉢である。外面淡黄茶色、内面淡灰茶色を呈し、胎土中に石英粒を顕著に含む。突帯下辺の局部にかろうじて刻みが看取される。口縁部内面に指圧調整をとどめる。直口タイプの 2 は口径 39 cm 前後、内面に粘土帯接合痕跡をよくとどめる。口縁端は面取り風の調整を行う。突帯上の刻みは「O」字状に施される。外面淡黄灰色、内面淡灰色、口縁の一部は黒斑状に黒灰化をみる。石英・長石やシャモット状の粒子を含む。口縁部全体が内傾する 3 は、突帯の断面は低く丸味を持つ。刻みも横開きに押圧されている。5 は器表の摩耗で判然とししない。6 は口頸部が短く強く屈曲し、古い要素をとどめる。内外面に粘土帯輪積み痕跡を残す深鉢で、口頸部外面はナデ調整、胴部外面は右回りの削り調整を加え、内面は指頭圧調整が顕著に行われている。口縁部の先端はシャープに仕上げられる。突帯上の刻みは精緻な「D」字タイプのものを密度高く施す。口径 32.4 cm に復元できる。8 も頸胴部境の稜線が高い位置にあり、1 条突帯になることは間

違いない。刻目は細身の「D」字タイプ。右側に広面緩斜を規則的に保つ。口縁外端面にも弱い刻み目が認められる。復元口径 36.6 cm。外面淡黄褐色、内面淡黄色を呈し、胎土にはやや粗い石英・長石粒を含む。口縁 9・10 もやや尖りぎみで端部を刻む。11・12 は 8 と同様な口縁形態を採り、端部刻み目は外面側に施している。9 は赴きを異にし、刻みを上端に入れる。明らかに小型の 13 は、口縁部突帯を下がる位置に付し、胴部は強く張る。復元口径 22.8 cm を測る。口縁部は丸く収められる。低い蒲鉾形の断面を呈する。刻みは「D」字状。胴部内面の二枚貝条痕調整が特徴的である。色調は外面淡茶褐色、内面暗橙褐色で、砂粒が密に入る。突帯が上向した位置に貼り付く 14・15・19 などは口縁端部の摩耗度が著しく、存在位置は 26・27 を含め損傷で端部を失っている可能性がある。17 は器壁の薄いシャープな深鉢で、口縁端直下に突帯を貼り付けている。

深鉢を口縁部形態により分類すると、直口のもの（20・21）、外反するもの（28・35）、口縁端近くで外反するもの（15・16・22）などに分かれる。突帯の幅や高さも、また刻み目の O・D・V の字状に識別することができる。口縁端の調整なども尖りぎみに終わらせるもの、面取り風の平滑面をなすものなど、バリエーションが認められる。41 以降のものは突帯や刻み目も摩滅が進んでおり、詳しく記載できないが、同様の突帯文土器とみられる。口縁端部が肥厚ぎみに終わる点で共通する 53～55 は、直口内湾化する。口縁部外端面に突帯風の造作をみせる。砲弾形を呈する 1 条突帯深鉢になる可能性が高い。59 は口縁部が反り気味に立ち上がる器形で、口端が内面に肥厚する。器形からみれば、浅鉢になる蓋然性は大きい。胴部片と考えられる 70・75・76・78・80・81・85 は、突帯やその痕跡がみられる。破片端に突帯が看取される 80・81・85 のような例は破断面に摩滅がみられ、これだけで口縁部突帯か、胴部突帯かの判別は困難で、砲弾形深鉢の口縁部になる可能性も捨て切れない。76・78 などの変化部位に刻み目のある突帯を持つ場合は、胴部突帯になるとみて大過なく、2 条突帯深鉢になるものと思われる。突帯上の刻みは基本的に「D」字状を呈するものが多い。

皿形あるいは浅いボール状の器形を持つ浅鉢も目立って伴っていた（65～69・71・72・77・79・90・91）。65～69・72・90・91 は粗製品であり、器壁も厚いものが多い。65・68・72・90・91 のごとく、粘土帯の接合痕跡が目立って残っている。とくに 91 のよ

うな器壁の厚さ 1 cm 以上になる分厚いものがみられる。痕跡のピッチは 1.5～2.0 cm 程度ある。径 1.0 cm 前後の粘土紐を押し潰しつつ、積み上げている土器が一般的である。

粗製浅鉢の器形は二通りあって、一つには口縁端を尖り気味に調整して、口縁部は内湾させるもの（66・68・72・90）。いま一つは、器厚の減じ方を抑制して斜め上方に直線的に口縁部を伸ばす一群であり（65・67・69・91）、調整技法の特性では、90 や 91 が内面を中心に板状工具を横方向に擦過させている形跡が窺える。77・79 は内面の指頭圧痕が目立つ。基面調整で粘土帯の接合残痕は確認できない。

精製浅鉢は口縁部が屈曲して「く」の字形に立ち上がるもので、82～84・86・88・89 などが該当しよう。器壁は全体的に薄い。口縁部と体部の屈曲は、器壁の厚さを変え、外面に稜線のはっきり入るもの（86・89）と、変化がナীবで器形変化の稜が際立たないもの（82～84）とに分けられる。86 は底部底面に輪台状の粘土紐貼り付けがみられ、上げ底風になる。調整は体部下半を横方向の削り調整とする。薄く仕上げられた底部 87 も、晩期の浅鉢とみてよかろう。88 も浅鉢の体部の下半と思われる（図 4～7）。

4. まとめにかえての若干の検討

大阪湾北岸の標高 1～2 m の海浜低地である打出浜における縄文集団の特性があつた震災復興調査を通じ明らかになった点は、実に貴重な成果であつた。災害下の埋蔵文化財調査の原点は、被災住民の理解を得、工夫を凝らして行うことが鉄則と言え、その後の日本列島における多くの復興調査の基盤となつたと考える。その舞台の一つなつた芦屋市の調査も新しい知見と遭遇し、間違いなく固有の土地の人間の生活・社会の動き、歴史の一端を明らかにしていった。その事例のほんの一部に過ぎないが、新しく見つかった若宮遺跡での 1 地点の縄文土器の内容について、詳しく記述した。そのことを踏まえ、検討事項をあらためて箇条書きにしてまとめにかえたい。

i) 大阪湾北岸地域では縄文時代晩期の突帯文土器の出土は頻繁となつたが、遺構に伴つた例は芦屋市内でこれが初めてであつた。そして、その前半期に比重を置く点に加えて重要である。すなわち口縁部・胴部の二条突帯が確立する船橋式・長原式として認識可能な土器以前の資料が一定数出土し、二条突帯成立以前の集落が当時の海岸至近地で確認された意義は大きい。弥生土器の出土がみられても同伴することは一切な

かつた。

ii) として、地点ごとの対比からも層位的な前後資料が確認できており、若宮遺跡の堆積構造の中での突帯文土器の変遷が提示できる。具体的には、滋賀里Ⅱ式→滋賀里Ⅲ式→滋賀里Ⅳ式（古様相）→滋賀里Ⅳ式（新様相）の変化であり、その延長上には長原式段階が不在となる。本稿では、Loc.1・4 の各地点の土器様相に触れる余裕はないけれど、参考図を掲げておく（図 8）。狭い範囲で突帯文土器集団が時差を有して移動している可能性があり、それと関わる形で弥生前期の遠賀川集団が近在地に登場してくることも非常に興味深い。遺跡の東方において、長原式単純期ないしは遠賀川式接触期の遺構・遺物が見つかる可能性を指摘しておきたい。

iii) 弥生前期～中期初頭の堅穴建物は、Loc.2 の第 4 面で 4 棟、第 5 面で 1 棟が検出されており、2 つの遺構面には共に第Ⅰ・Ⅱ様式の弥生土器が伴出している。時期の認定に幅を持たざるを得ないが、短期間復旧型の集落を想定させる（福島・上垣・藤井・森岡 1999）。遺構には土坑墓・土器棺墓を共存させる関係から、生活様式を水田稲作の場に据えた定着性の強い初期農耕集落が成立を見ており、磨製石包丁を伴っている。弥生時代前期・中期の居住域は堅穴住居跡の検出で明証され、Loc.2・3 を中心に農耕民の開田活動が展開をみたのであろう。周辺地で小区画水田の検出が見込まれる。

iv) Loc.4 第 4 遺構面の SR02b では、滋賀里Ⅲb 式・滋賀里Ⅳ式古相が出土し、生駒西麓産胎土の土器も含まれていたが、紹介した Loc.3 においては顕著ではない。本地点の突帯文土器は、多分に斉一的で、色調は全体的に暗黄褐色～暗黄色を基調とし、胎土には適度な砂粒を混和させることで共通する。原則的にすべて在地的な胎土と思われ、六麓荘台地から南に派生する翠ヶ丘丘陵先端部付近の一次粘土を採掘し、素地として活かしたのであろう。含有鉱物の多くは、六甲山系の黒雲母花崗岩の造岩鉱物に由来するものであろう。

おわりに

6 年間に及んだ若宮地区における震災復興調査は、急ぐ工事計画との擦り合わせ、調査に関わる事務手続きや実施経過に紆余曲折がみられたものの、芦屋市内 5 地区の震災復興予定区域の事業推進の中で、最も急ピッチで進捗し、最初に終着した。新知見も多い報告書 2 冊も公刊されており（森岡・竹村編 1999、竹村編 2001）、支援の成果があがったわけである。このた

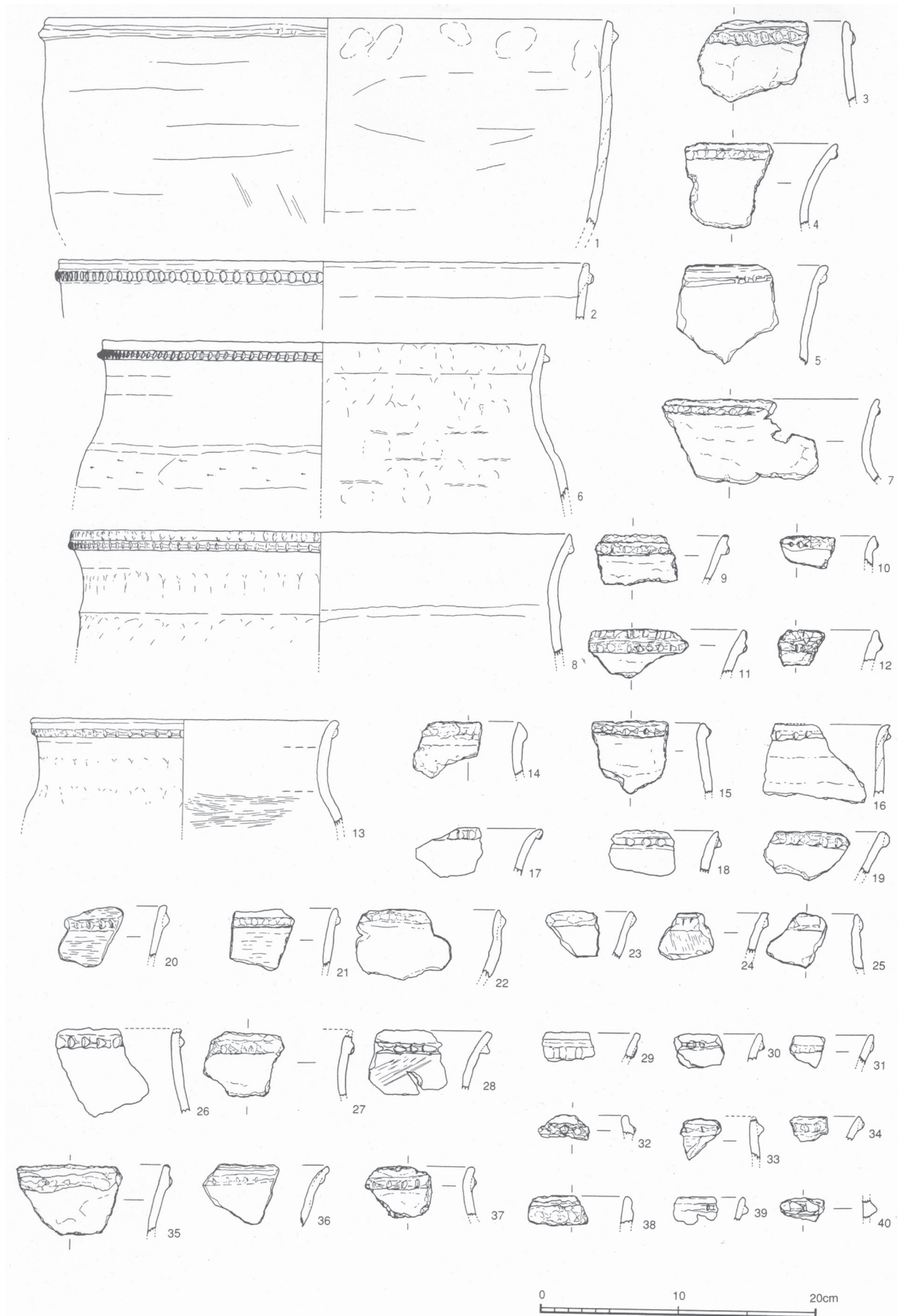


図4 第3地点出土縄文土器実測図(1)

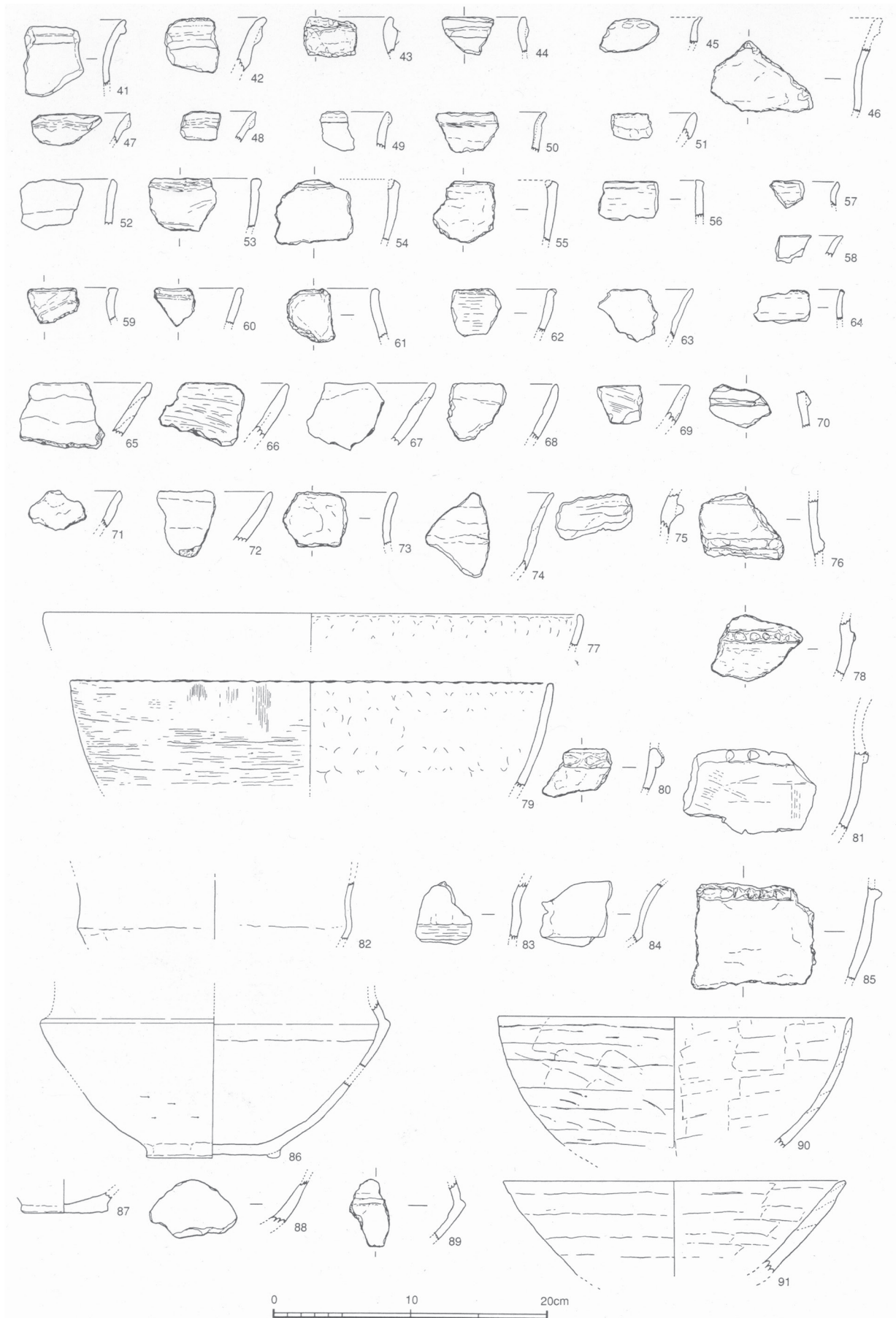


図5 第3地点出土縄文土器実測図(2)

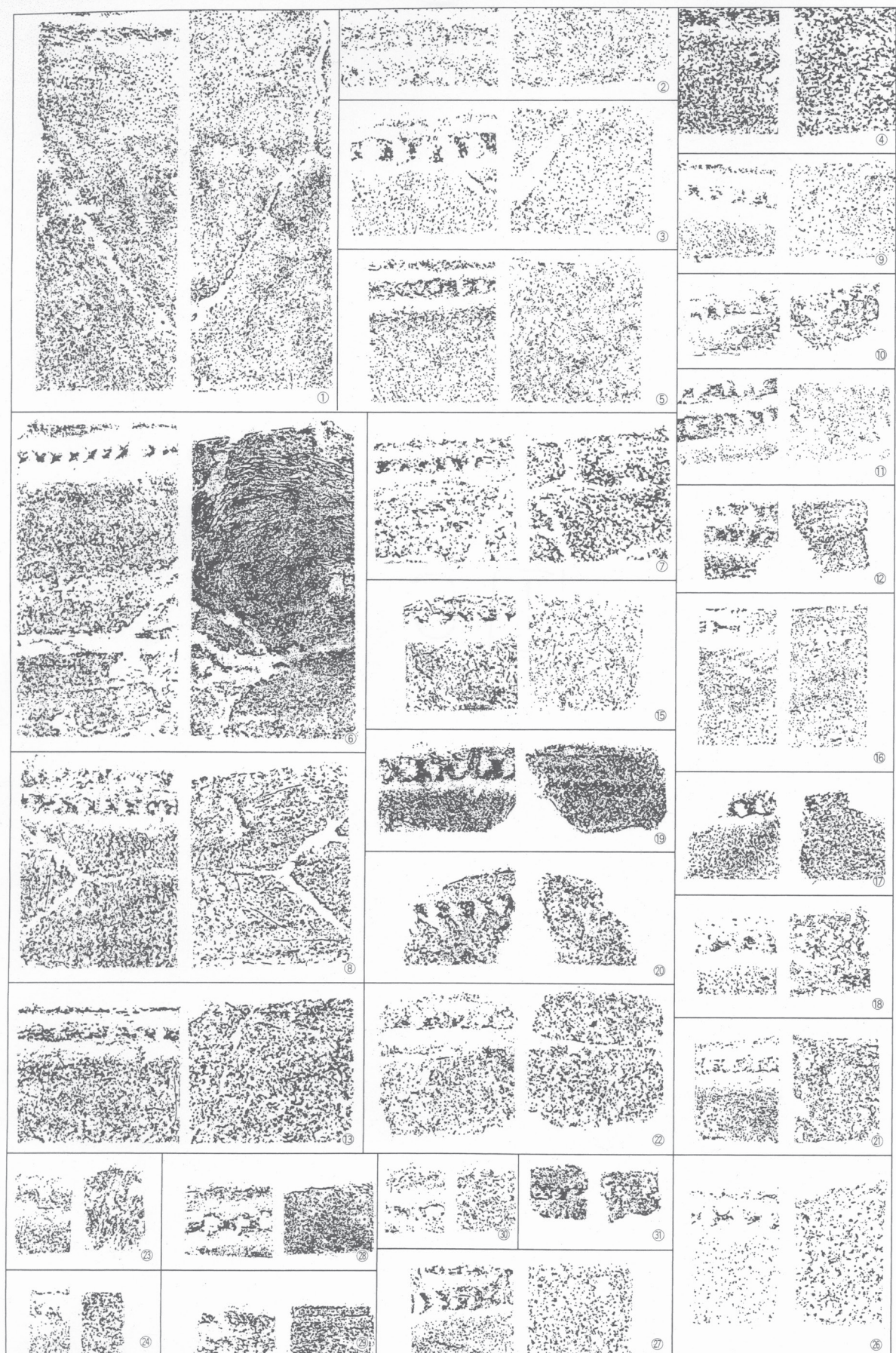


図6 第3地点出土縄文土器内外面拓影(1)

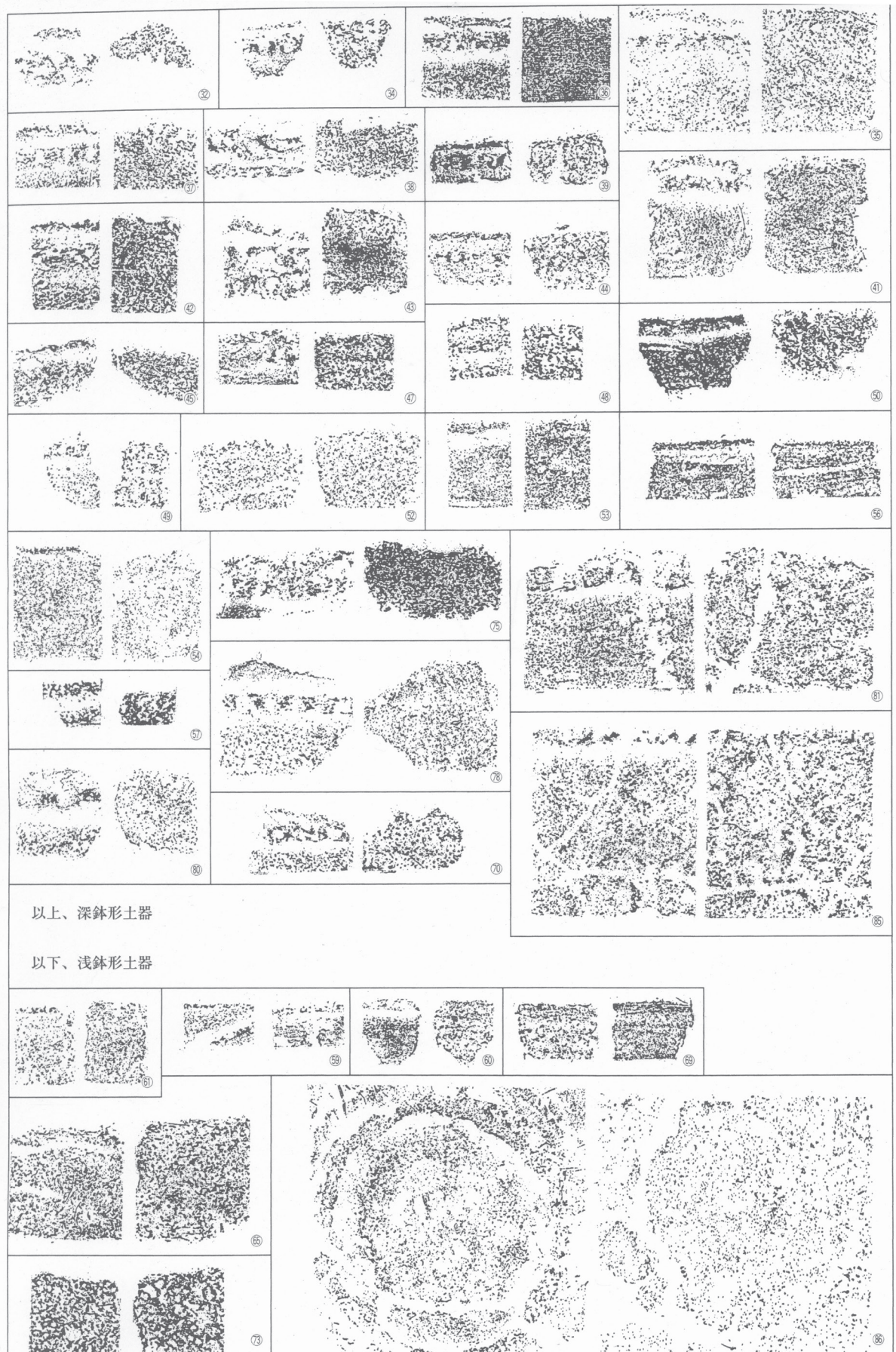


図7 第3地点出土縄文土器内外面拓影(2)

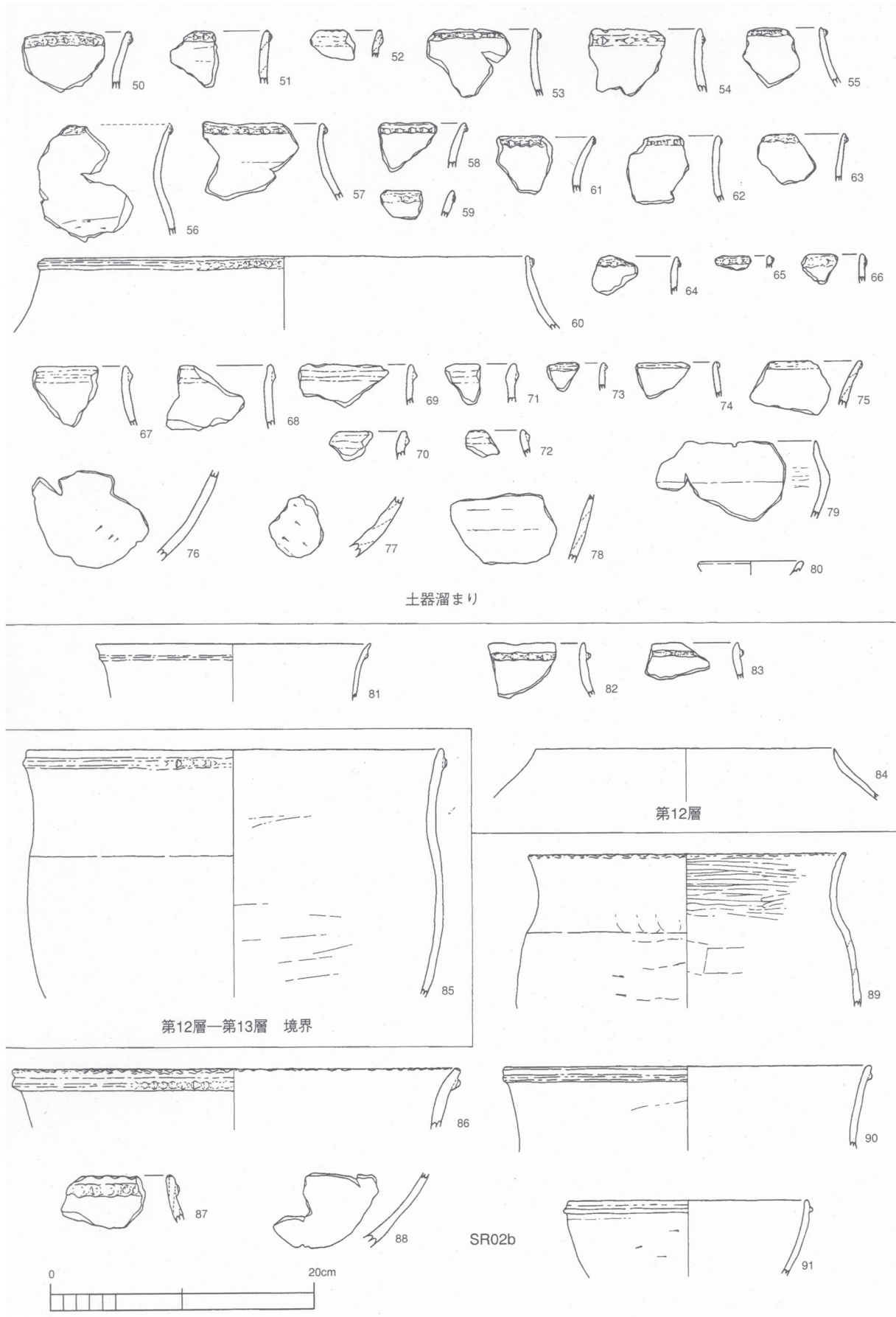


図8 第4地点出土縄文土器実測図(参考)

び再検討して、縄文時代晩期前半の不安定な堆積環境を同後半には克服して、突帯文土器段階には積極的な定住的活動を行い、遠賀川集団を招致せしめる諸条件を整えたといった説明を可能とした。さらに弥生時代中期には、厚い砂の堆積がみられ (Loc.10)、古環境の変化が認められるが、この点に関しては、2つの考え方が対峙する。佐藤隆春はストーム時に海からの波が到達する位置にあったとする見解を述べるが (六甲土石流団体研究グループ 2001 など)、辻康男は複数の調査地点における遺跡堆積層の観察とその層序対比から、海浜の砂とみるより河道充填堆積物と考える意向を示し、見解の紡ぎ出された相違をみており、向後に課題を残している。

なお縄文土器の整理を担当し、本稿でも再び検討した若宮遺跡 loc.3 の試掘確認調査は森岡秀人・竹村忠洋が担当し、全面調査が必要と判断され、「阪神・淡路大震災に係る埋蔵文化財発掘調査の支援に関する協定書」第3条第3号アの規定により、兵庫県教育委員会教育長に依頼文書を提出した。それに基づき、本調査は三輪晃三・永光寛が担当し、1997年10月13日～12月5日の期間実施された (発掘調査面積 235㎡)。遺物の分類整理は森岡が主に担当した。震災の渦中にご支援いただいた多くの関係者に厚くお礼申し上げたい。末筆となったが、長いお付き合いのあった矢野健一先生のご退任を祝い、今後のご発展とご健康を切に祈念いたします。

引用・参考文献

芦屋市 1997『阪神・淡路大震災 芦屋市の記録Ⅰ 95～96』
 芦屋市 1999『若宮地区震災復興住環境整備事業 若宮—安全・快適でコミュニティのあるまちづくり』
 芦屋市 2001『復興への歩み 阪神・淡路大震災 芦屋市の記録Ⅱ 1996.4-2000.3』
 芦屋市教育委員会 1997『観覧のてびき 最新発掘！考古学からみた芦屋展—95～97 震災復興調査の成果』
 芦屋市建設部開発事業課 2001『若宮 (安全・快適でコミュニティのあるまちづくり)』
 泉沢良 1990『西日本凸帯文土器の編年』『文化財学報』第8集 奈良大学文学部文化財学科
 岡田篤正・東郷正美編 2000『近畿の活断層』東京大学出版会
 神戸市・建設工学研究所 1999『阪神・淡路大震災と神戸の活断層』

佐藤隆春 1999「調査地点の地層の運搬・堆積機構と堆積環境」『若宮遺跡 (第1・2地点) 発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業 (芦屋市若宮町住宅1号館建設) に伴う埋蔵文化財事前調査の成果—』芦屋市文化財調査報告第30集 芦屋市・芦屋市教育委員会
 辻康男 2000「六甲南麓地域における縄文遺跡の立地と堆積環境」第54回京都縄文文化研究会発表要旨・資料
 辻康男 2001a「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程について—芦屋川・宮川の事例—」討論と学習会 地学団体研究会六甲土石流団体研究グループ堆積学ゼミ主催 扇状地はいつ、どのようにしてつくられたか—六甲山地南麓扇状地の地形・地層と形成過程 発表要旨・資料
 辻康男 2001b「芦屋川・宮川流域沖積扇状地における更新世末期以降の地形発達史と遺跡形成過程—縄文時代後期～弥生時代前期の堆積環境を中心として—」第98回近江貝塚研究会発表要旨・資料
 辻康男・森岡秀人・竹村忠洋 2001「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成について—芦屋川・宮川の事例—」第36回低湿地遺跡研究会発表要旨・資料
 寺沢薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社
 寺沢薫・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
 永光寛・三輪晃三 1998「打出小槌遺跡 (第25地点)」『平成9年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
 福島孝行・上垣幸徳・藤井整 1999「若宮遺跡第2地点 (打出小槌遺跡第24地点) の発掘調査」『若宮遺跡 (第1・2地点) 発掘調査報告書』前掲
 藤田和夫・笠間太郎 1982『大阪西北部地域の地質』 (地域地質研究報告5万分の1図幅) 通商産業省工業技術院地質調査所
 細川道草 1963『芦屋郷土誌』芦屋史談会
 前田昇 1971「芦屋の自然環境」『新修芦屋市史』本編 芦屋市
 南博史 1989「大阪湾周辺地域における縄文晩期凸帯文土器の変遷—口酒井遺跡第11次発掘調査を中心として」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第二集 京都府京都文化博物館
 三輪晃三・永光寛・森岡秀人・竹村忠洋 2002「発掘調査の概要 第3地点の調査」『若宮遺跡 (第3・4・

10・11・16・17・25・31・32・33・34 地点) 発掘調査概要報告書 ― 若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果 ―』芦屋市文化財調査報告第 38 集 芦屋市・芦屋市教育委員会

村川行弘・森岡秀人 1976「弥生時代」『新修芦屋市史』資料篇 I 芦屋市役所

森岡秀人 1984「縄文ムラと弥生ムラの出会い ― 近畿北部を中心として ―」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所

森岡秀人 1993「初期稲作志向モデル論序説 ― 縄文晩期人の近畿的対応 ―」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室

森岡秀人 1995「埋蔵文化財の保護意識と阪神大震災 ― 被災地芦屋の現状と展望 ―」『月刊文化財発掘出土情報 (緊急特集 阪神大震災と文化財)』4 月号 (通巻 149 号) ジャパン通信社

森岡秀人・竹村忠洋 1999「若宮遺跡をめぐる二、三の考証」『若宮遺跡 (第 1・2 地点) 発掘調査報告書』前掲

森岡秀人・竹村忠洋編 1999『若宮遺跡 (第 1・2 地点) 発掘調査報告書』前掲

家根祥多 1982「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4

縄文土器Ⅱ 雄山閣

家根祥多 1996「滋賀里式土器」『日本土器事典』雄山閣

六甲土石流団体研究グループ 2001「六甲山地南麓扇状地での土石流・洪水堆積物の堆積時期・堆積場の変遷」『地球科学』55 号

矢野健一 2008「関西地方の突帯文土器 ― 京都府の概要」『関西地方の突帯文土器』第 8 回関西縄文文化研究会資料集 関西縄文文化研究会

矢野健一 2016『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社

挿図出典

図 1 若宮遺跡位置図

図 2 第 3 地点検出の自然流路平面図

図 3 第 3 地点流路東西断面図

図 4 第 3 地点出土縄文土器実測図 (1)

図 5 第 3 地点出土縄文土器実測図 (2)

図 6 第 3 地点出土縄文土器内外面拓影 (1)

図 7 第 3 地点出土縄文土器内外面拓影 (2)

図 8 第 4 地点出土縄文土器実測図 (参考)

以上、すべて芦屋市文化財調査報告第 38 集収載図を引用改変したものである。

